螢狩――愛人室生犀星に

酔つぱらつて街をあるけ、夜おそくあるけ。
ああ、窓の上には憔悴した螢が居る、汝の圓筒
帽を捧げ光らせ、巷路にひろごり輝くところの
菫を見よ、私の酔つぱらひの兄哥よ。

しんあいなる私の兄弟よ、生まれない不具の息
子よ、お前のダンスの繊細なそして詠嘆風な奇
怪なダンスの足どり、靴の底を見たまへ、更に
天井の蜂巣蝋燭を見たまへ、汝は恐るべき殺戮
者だ、それ見ろ、指は血だらけだ。

つつしんで汝に浸禮聖號を捧ぐ、汝の名誉ある
淫行のために。
淫行の長い沈黙から月夜を恐れる。
螢だ、いちめんの青い螢だ。

これが別れだ、おんみよ、遠くから私の疾患の手を吸つて呉れ、手はしなへほろびてゆく、遠くにらうまちずむの墓場がある。光る、大理石の墓標だ、ああ、涙が凍る、なんといふ痛ましい別れだ、か細い指の先で、つぶされた螢が泣いて居るよ。

（「萩原朔太郎全詩集」未発表詩篇より　築摩書房）